

ニッポン

ドクター和の



臨終凶巻

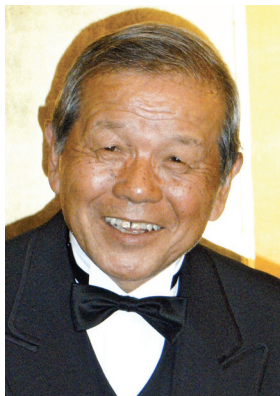
チャーミングな垂れ目の奥の

眼光の鋭さ。喜劇も悲劇も彼が画面にいただけでドラマに厚厚さが増しました。2月24日に80歳で亡くなった俳優の左とん平さん。死因は心不全でした。

先週、この連載で取り上げた俳優の大杉漣さんも心不全でした。しかし、同じ心不全でも2人の旅立ち方はまったく違います。心不全といっても大きく分けて急性心不全と慢性心不全があります。

左さんは昨年6月、胸の痛みを訴えて緊急搬送されました。このときの診断名は、急性心筋梗塞。年とともにコレステロールなどが血管壁にたまってコブとなり、このコブの被

45 左とん平



膜が破れてできた血栓が心臓の血管を一部詰まらせた状態が狭心症で、完全に詰まると心筋梗塞となります。至急治療しないと命にかかわる病気です。幸い左さんは、緊急処置で一命を取り留めました。しかし、その後、誤嚥性肺炎を繰り返して、徐々に体力が低下。ここ数カ月は酸素呼吸器をつけ、会話もままならず寝たきり状態だったようです。

長尾和宏 (ながお・か東第2兵二カ
ずひろ) 医学博士。大阪府生駒市で「人を診る」総合診療を目指す。著「痛くない死に方」は、関西国際大学客員教授。

闘病のあいだに心臓が全身に血液を送り出すポンプ機能が低下する慢性心不全に至って旅立つケースは、珍しくありません。がんばかりがメディアで取り上げられがちですが、日本人の死因の第2位は心疾患。1位のがんで年間37万人(2015年)が亡くなりますが、さまざまな部位にできたすべてのがんの総死亡者数。これに対し、年間20万人(同)が亡くなる心疾患は心臓という一臓器だけの話ですから、心臓がいかに重要な臓器かがわかります。

一昔前ならば、急性心筋梗塞で緊急搬送された時点で、そのまま亡くなっていった可能性がありました。しかし昨今は医療技術の発達により、多くの命を救えるようになってきました。

左さんも集中治療室での治療後、一時は退院も視野に入れるほど元気になられたということです。から、この9カ月の延命

期間は決して不幸ではなかったと思います。ご家族も心の準備ができたはずで、亡くなられたその日、奥さまのご意向で一晩だけ自宅に帰り、翌日に葬儀場に赴かれたということだと思います。できるならば、生きているうちに一度、家に帰ってきてもらいたかったことでしょう。

左さんと同じように心筋梗塞の治療を受けた後も慢性心不全で入退院を繰り返して、在宅医療を受けながら最期まで口から食事を取り、平穏死される方も私の患者さんの中におられます。

しかし倒れる直前の79歳まで現役として活躍されていたのですから、素晴らしい役者人生でした。「優しい人でした。怒るようなこともないし。(亡くなったとき)穏やかな顔をしていました」と奥さまのコメント。最後まで怒らない、笑顔の人生。私にはなかなか、まねできません。

慢性心不全でも叶う平穏死